

第2回近畿地区樹木医講演会 木の国和歌山発「人と樹木のよりよき共生への道のり・・・」

H281008 山本冒頭挨拶原稿 (20min)

おはようございます。県外よりお越しの皆様ようこそ和歌山へ。和歌山県支部長の山本でございます。本日はよろしくお願いたします。昨年の10月17日盛況の内に開催されました兵庫県支部による第一回神戸開催を受けまして、本日ここ和歌山市にて第二回目の近畿樹木医講演会を開催させていただきます。

前回近畿地区連協副会長として講演会閉会に際しまして、ご挨拶申し上げました「次回開催をお楽しみに」の一言が、本人所属支部にこうも重くのしかかってこようとは、「やはり沈黙の方が金」を少々実感しておるところです。とりもなおさず本日ここに県内は元より、県外遠方より予想を上回る多くの樹木医の皆様や、行政、林業、造園など樹木に直接間接に携わっていらっしゃる皆様のご出席をたまわり、無事開催と相成りましたこと、主催者代表と致しまして感激の至りでありますと共に、心より御礼申し上げます。

平成3年度に樹木医制度が発足して既に25年を数え、今や樹木医の登録者累計総数は本年3月現在2565名に至っております。近畿地区2府4県におきましては、その約15%の376名が現在登録されております。さて我が紀州紀ノ國和歌山県支部はと申しますと、現在樹木医13名に留まり、近畿地区では最小規模の弱小、いや少数精鋭支部と成っております。付きましては本日のこの講演会、誠に申し訳ないのですが、スタッフ不足で何かと行き届かない点や、不手際多々あろうかとは存じますが、どうか一つお手柔らかなと、冒頭主催スタッフを代表いたしましてお願い申し上げます。

さて当和歌山県はかつて「紀伊國」と称されましたが、7世紀の成立当初は雨が多く森林が生い茂っているさまから、「木國(きいこく)」と命名されたと言われております。紀伊半島三重、奈良、和歌山の三県に連なる、日本でも有数の降雨地帯である急峻な紀伊山地とその大樹海の西端部分が、県土の大部分を占め、森林率は実に県土の77%に及び、現代に於いても「木國」の本領は継承され続けて来ておるのでございます。

またご存じの様に、紀伊山地の多くの部分が「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産登録されました。「日本人がもつ山や森などの自然を、神仏が宿るところとする信仰を育むと共に、人と自然が織りなし形作られた独特の文化的景観」が、世界的に高く評価された事に依るとされております。とりわけ世界遺産の中核を為すのが吉野大峰、熊野三山、高野山の三霊場で、何れも豊かな自然や、深い森がその信仰の基盤を支え続けております。

三霊場の一つ高野山をお開きになりました空海は、日本古来からの土着的精霊文化と中国伝来の密教とを融合され、草木のみならず山川までも含めたすべての存在に靈性を認め、「山川草木悉皆成仏」と説くなど、その後の日本人文化の根幹を形成してゆく万物共

生の文化へと昇華していったとも言われております。また時代は下り明治の時と成り、社叢林の保護や粘菌の研究者として著名な、和歌山が生んだ稀代の大学者南方熊楠を育む土壌となったことにもつながって来た訳でございます。この様に紀ノ國和歌山は名実共に、樹木や森や大自然との共生(ともい)きを古よりの文化として、脈々と大切に継承して参りました歴史的な特徴と、南北に伸びた地形は紀南部では亜熱帯に近いアコウをはじめとした暖温帯植生から、奈良県境のブナ帯の冷温帯植生にいたる多様な植生を誇る、元祖或いは本家「木の国」ツリーキングダムなのであります。冒頭司会進行 MC 担当の小南樹木医からもご案内がございましたが、本日のこの講演会の樹木医 CPD プログラム名称は『木の国和歌山発「人と樹木のよりよき共生への道のり・・・』と銘打っておりますが、今回講演会全体を通して基調とするテーマは、「樹木医と生態学」とさせて頂いております。

立地の無機的な環境と生物とを一体の系として取り扱い、その相互作用を扱う学問である生態学。その英語訳は、既に十分日本語としてもすっかり定着しておりますおなじみの言葉「エコロジー」ですね。好感度が高く便利なのか昨今乱用気味に使われてますが、決して日本語の「もったいない」の英語訳で無いことは言うまでもありません。

環境と生物をダイナミックな系として俯瞰し、要素の関係性や構造の意味を問う「生態学」は、一見私どもフィールド実践が主体の樹木医或いは造園や林業とは非常に近いようではあります。純粋学問としての生態学は抽象化の次元が高く、時に巨視的すぎたりまた逆に微視的過ぎたりと、ヒューマンスケールである私どもの現実実業とは若干距離を覚える関係と言わざるを得ませんでした。しかし、環境世紀とも言われる 21 世紀に入り早 16 年がすぎ、前世紀に予言されておりました地球環境レベルでの諸問題が現実として様々な形で顕在化する中、地球温暖化や異常気象害、また生物多様性などと言った言葉が新聞紙面やマスコミに登場することが日常茶飯となってまいりました。人類諸活動の制御と共に、人類存続の根本基盤である地球生態系を存続可能な状態で維持するための技術が、切実に時代要請されております。そんな中、生態学をベースとした応用実学である、自然生態修復工学や自然再生工学という分野が脚光を浴びつつ有ります。まるで地球生態系を意のままにコントロールしテーマパーク化を目指すような、傲慢不遜な語感が誤解を招きやすいのですが、仮に人類が自業自得ですべて滅亡したとしても地球生態系はまるで何事も無かったようにダイナミックに流転していくのは地史を顧みれば明白な事でしょう。これらの技術は人類存続が可能な地球生態系状態を維持するため、自然の営みに最大級の敬意を払った上での、修復や移動や再生という共生のための技術群であり、マネージメント技術であり、また価値観なのであらうと思われまます。

樹木医は単位として個体を取り扱うことが多く、また樹木本体そのものを取り扱う技術群ともいえますが、移動能力を持たない樹木が立地環境と不可分な存在であることは日々

痛感しておるところです。土壌や気象などの無機的環境をはじめ、社叢や樹林、緑地林においては他の個体や動物などの有機的環境との関係性や構造が非常に大きな問題となって参ります。特に都市環境に於いて特殊な有機的環境の一つでもある人為の影響の及ばない個体はありません。生態学そして自然生態修復工学や自然再生工学の知見は、樹木本体にのみ近視眼的に陥りやすい視点から、より大きな視点視座を提供してくれると共に、無機的環境との関係性のみならず、様々な人為圧を冷静に環境圧として捉え対応する手掛かりや指針を与えてもらえるものと期待されます。

先ほど本日の次第が照会されましたが、本日前半二時限の基調講義は、ご存じの方も多いとは思いますが、応用生態学や自然生態修復工学がご専門の著名な第一線の研究者で、最近何かと樹木関係の業界では話題の「自然再生士」資格の仕掛け人或いは黒幕のお二人。十数年来のご親交とご指導頂いております和歌山大学システム工学部環境システム学科教授の中島敦司先生、そして養父志乃夫先生がお忙しい中お時間をお割き頂きました。両先生にはそもそも生態学とは何か、都市の生態系はどうなっているのか、生態系サービスいわゆる自然の恵みとは、また昨今注目を集める生物種多様性の実務はどうか、と言う辺り大変興味深いお話が伺えることと思います。ただお二人ともかなりのマシンガンターカーなので、くれぐれも毒気に当てられないよう、ご注意頂きたいと思います。

さて両先生の講義に続きまして三四時限は、我が和歌山県支部の事例報告発表をさせて頂きます。プレゼンターは澆刺とした新進気鋭県職員の村瀬美美樹木医と栗生剛樹木医のお二人にお願いしております。この会場の県民文化会館は、和歌山県庁舎の向かいに位置し、県都である和歌山市の中心部にありますが、すぐ東側を通る国道42号線の向こう側には、和歌山市民の、そして和歌山市戦災復興のシンボル和歌山城がございます。

本年は紀州が生んだ「暴れん坊将軍」こと、和歌山城五代当主徳川吉宗が、江戸幕府第八代将軍に就任してから三百年という記念すべき年に当たるとして、現在和歌山市では数々の記念観光行事を展開中とございます。

現在、和歌山城天守閣を頂く虎伏山を中心とする城址公園は「和歌山公園」と公称し、国の重要史跡文化財であり、県都の風格を醸し出すランドマークであり、また県都の重要な観光拠点でもあります。そして和歌山市民にとりましては、健康的な市民生活のためのセントラルパークであり、また近年顕著なヒートアイランド化を抑制する巨大空気調整浄化システムでもあります。しかし、多重な要請を一身に背負うシンボル公園にもかかわらず、樹木樹林の維持管理についてはごく一部の目に付く修景樹を除き、ほとんどが長年に渡り粗放状態と言わざるを得ない状況にありました。樹木は、時と共に永年肥大成長する特質を持ちます。樹木の肥大化は周囲立地環境の緩衝安定化や生息生育地の増大として生物多様性に大きく貢献しますが、放置あるいは自由放任すれば人の利用便益や安全性とは

激しく衝突します。また逆に人の利用を自由放任するなら、特に根圏上部の樹下利用等直接交錯する部分の利用頻度が上がれば、損傷や踏圧による土壌硬化などにより樹木の衰退は避けられません。人と樹木が混在し共に生きるいわゆる造園空間は、様々な諸問題が生じる空間でもあります。今回、和歌山市が科学的な現状分析と管理指針策定の基礎資料を望まれたことを機に樹木医会和歌山県支部が調査診断実務の主体として、平成24年度から3ヶ年に渡り、特に問題の多かった天守閣虎伏山樹林の大径樹と和歌山公園敷地全域に植栽された桜類全株の調査診断業務に携わることとなりました。

最近でこそ街路樹調査などの複数樹を扱う機会もでてまいりましたが、通常は老木や記念物、貴重樹などの個体樹や、せいぜい点在樹を扱うことが主であった樹木医にとって、このような規模の調査診断業務は極めて貴重な機会と成りました。また多重な要請を一身に背負う京都のシンボル「和歌山公園」の調査診断と言うことで、その調査診断量の多さと共に、責務の重大さに身の引き締まる思いを経験させて頂きました。そして最終的に業務規模は、実に天守閣虎伏山4.7haの胸高周長90cm以上大径樹446本、園地全域約20haに植栽された4～50年生桜樹類全株605本となる、極めて大きな規模の調査診断業務となりました。

実務と致しましては、支部会員チームによる現地毎木踏査、調査野帳記録、電子データ化、そしてパソコンでの統計解析、解析に基づく管理指針への展開等々経験の浅い事ばかりの連続で、振り返ればまだまだ進め方の改善すべきポイントは山のようにありますが、この度の近畿樹木医講演会という機会を頂戴し、未熟ながらもその調査診断の成果報告というよりは、寧ろこのような大規模な調査診断が依頼された場合の先行事例としてのご参考のため、反省点や改善点を含め対応のポイントなどを、ご報告させて頂きたいと思えます。数百本というレベルになりますと、人力手書きでの処理では最早不可能な数量となります。エクセルを主体としたコンピューター処理を避けて通れません。昨今の「説明責任」であったり、「見える化」「分かる化」「出来る化」であったりと、パソコン画面との格闘に悩まされますが、ますます今後もこの傾向が強くなると思われます。今回の樹木医講演会を機会に皆さんで、パソコンベースでのワークフローのノウハウ体系化やパターン化を一度考えてみるきっかけとしては如何でしょう。無論今回の調査診断規模は規模が大きく、虎伏山という半自然林調査診断と植栽されたソメイヨシノを中心とする桜類の調査診断という異質な二種類の業務を含むため、本日の限られた時間内ですべてのことをご紹介申し上げるのは、元より不可能ですので細部については十分ご紹介できない事が多いかと思えます。時間が許す限り、また能力の限り質疑にはお答えいたしたいと考えておりますが、今回は調査診断業務のワークフロー報告に重きを置かせて頂き、不備不足な点はまた次の機会に譲らせて頂きますことを、予めご承知置き下さい。

今回、やはり樹林や樹群を取り扱うと言うことで個体樹木調査診断ではさほどクローズアップされてこなかった『環境と生物を一体の系として取り扱う生態学』の知見が、現地調査からデータ解析、考察、維持管理所見に至るまでとても重要となりました。和歌山公園は都市の中の樹林という、通常 of 自然生態系とは著しく異なった、著しい人為的攪乱を受けた歪な都市生態系の特異性があります。その特異性を踏まえた上での維持管理計画等々には、個体レベルを越えた領域の視点視野が求められました。樹木樹林はその生育する環境から影響を受けると同時に、環境に対し影響を与え改変する作用が大きいことはよく知られたことですが、現地樹林の内部構造、及び外部接触境界面の構造、また構成単位相互の関係性、立地する環境との関係性等々を調査分析し、現地樹林が現地樹林たらしめているのは、如何なる理由に依るものか、また今後樹林は如何なる動向を示すのか、人間活動との関係性はどうか、等を調査分析し管理指針展開や診断所見を導き出すには、「生態学」的視点視座が必要不可欠であることは言うまでもありません。今回の調査診断が何処まで現地樹林の実態と動向を明らかに出来たかは、甚だところもとない部分も無きにしも非ずかもしれませんが、少なくとも現状が決して安閑と放置放任しておいて今後も健全に存続するとはおも割れない点は炙り出し、示すことが出来たとは考えております。

考えてみれば、樹木医も造園も林業も、冒頭述べました「山川草木悉皆成仏」という教えにみられる、古くから脈々と継承されてきた世界に誇りうる日本特有の「木の文化」や「自然観」が有って初めて成立する職業ですね。人と樹木が或いは自然とが互いに尊重し合い織りなし醸成された美しい景観を文化的景観、カルチャーランドスケープと称し、「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に選ばれた根拠でもございます。本日 10 月 8 日は十という漢字と八という漢字を重ねると「木」という漢字が出来るところから、「木の日」に選定されているようですね。「木の日」に元祖「木の国」和歌山で一日ドブプリと「木の話」でご堪能いただけたら幸いと趣向でございます。

最後に、この講演会開催にあたりまして木の神様のご加護は元より、和歌山市の関連部署、和歌山県の関連部署の皆様、また(一社)日本樹木医会、(一財)日本緑化センターの関係者様、そして共催を頂きました(一社)日本樹木医会近畿連絡協議会及び(特非)和歌山県造園緑化技術センター様、後援をお引き受け頂きました和歌山県造園建設業協会様ほか関係諸機関の一方ならぬご協力とご助力を賜りました。感謝申し上げますと共に深く御礼申し上げます。

今回のこの講演会がご参加頂いた皆様方にとって、有意義で有りますことを心よりご期待申し上げます。冒頭の挨拶と致します。それでは 1 日宜しく申し上げます。